



〔話題〕

医学用語語源対話 VII

杉田 克生¹⁾ 池田 黎太郎²⁾

(2021年8月23日受付, 2021年9月1日受理, 2021年12月10日公表)

Key words: 医学用語, 神経

略語一覧: L: ラテン語, Gr: ギリシア語, I-E: インド・ヨーロッパ語族, G: ドイツ語

語源を知ることの面白さに一旦気づかされると、知的好奇心が一層呼び覚まされます。医学用語は時空を超えて医療者が伝えたい「概念」を書き残すために創られました。その書き残された用語を語源的に読み取ることにより、今までの積み重ねられてきた医療人のハートに触れることができると思います。前回医学用語語源対話VI[1]では何かとわかりづらい不随意運動や発作性疾患などの神経症候用語を取り上げました。またそれまでの語源対話でも、神経関連の用語をとりとめなく対話形式で記述してきました。今回は神経解剖学の中で従来取り上げてこなかった医学用語を中心に、語源学的観点から神経学への理解を深めてみます。

なお用語の語源は主に Klein's Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language [2]から引用し(“ ”), 英語説明は斜体で示しました。また神経解剖学用語は「神経解剖学講義ノート」[3]を参照しました。

杉田: 中枢神経系は脳“brain”と脊髄“spine”からなります。脳の発生は前脳胞“prosencephalon”, 中脳胞“mesencephalon”と菱脳胞“rhombencephalon”の3つのふくらみが脳の原基です。ついで前脳胞は終脳胞“tel-

encephalon”と間脳胞“diencephalon”に分かれ、菱脳胞は後脳胞“metencephalon”と髄脳胞“myelencephalon”になります。脳胞“encephalon”という語は“Gr. en, in + cephalos, head”すなわち頭の中身=脳という理解から作られています。これに様々な接頭辞をつけて分類するのは漢字文化圏も同様ですが、日本人には“pros”, “meso”, “rhombos”, “telos”, “dia”, “meta”などギリシア語由来の接頭辞の区別が分かりにくいところがあります。

池田: “brain”という英語は“Gr. bregma, the front part of the head”から派生していますから、“forebrain”, “midbrain”, “hindbrain”と言い表しても日本人にとっては学術語として不足はありませんが、欧米人にとっては物足りないのでしょうか。そこで“pros-, mes-, rhomb-, tel-, mid- + encephalon”という医学用語を考案したのですが、ここに不用意な躓きの原因が隠れています。

まず前部, 前方“Gr. proso, forwards, onwards, further; far off, far away”を発音の便宜上“pros-”と短縮すると“Gr. pros-, motion from, by, towards”という意味になってしまいます。「それでも構わな

¹⁾ 千葉大学子どものこころの発達教育研究センター特任教授

²⁾ 順天堂大学名誉教授

Katsuo Sugita¹⁾, Reitarou Ikeda²⁾. Dialogue on the etymology of medical term VII.

¹⁾ Research Center for Child Development, Chiba University, Chiba 260-8670.

²⁾ Juntendo University, Tokyo 113-8421.

Phone: 043-226-2975. Fax: 043-226-8588. E-mail: sugita@faculty.chiba-u.jp

Received August 23, 2021, Accepted September 1, 2021, Published December 10, 2021.

い、医学用語では前方という意味で用いている」と主張するなら、装具“*prosthesis, putting to, application*”などとの整合性が問題になります。終脳胞“*tel-encephalon* < Gr. *tele-* + *encephalon* < Gr. *telos, finish, end*”は、“*telos*”の“*tel-*”を残して“-*os*”を削っていますが、他の用語では“*tele-ology* (目的論)”, “*tele-operator* (遠隔操作装置)”などがあります。終脳“*telencephalon, cerebrum, end brain* < Gr. *telos, end; cerebrum, brain*”は、前脳の前方部分で発達して嗅葉、大脳半球皮質、終脳核、基底核、線条体、扁桃体になります。

間脳胞“*di-encephalon, interbrain* < *dia* + *encephalon* < Gr. *dia-, through, throughout, between*”は主として通過や横断を意味する接頭辞であり、“*di-*”は“Gr. *dis, di-, twice, double, two*”を意味し中間や間は表わしません。間脳胞の主体は前脳胞“*prosencephalon, forebrain*”の一部と視床(視床上部、視床背部、視床腹部、視床下部)とから成ります。視床“*thalamus*”は間脳の大きな方の背側部分を形成する灰白質の大きな卵形の塊で、内包と尾状核の内部の奥に位置しています。この語源は古代の屋敷の奥の婦人部屋で家人のみが出入りを許される場所です。これが後に大きな船の漕ぎ座を備えた下段の船室も意味するようになったのは、舷側に突き出るオールと多数の神経線維との相似によるのでしょう。ローマの軍船の場合には奴隷の漕ぎ手は座席に鎖で縛り付けられて、船の沈没の際には運命を共にします。

中脳胞“*mesencephalon, midbrain* < Gr. *mesos, middle + encephalon, brain*”は、胚神経管の間脳と橋の中央から発達した脳の部分、視蓋と大脳脚からなり、前脳胞と菱脳胞の間に位置します。中部“Gr. *mesos, middle*”を“*mes-*”と記すなら、混乱が生じます。この混乱の原因はギリシア語を欧米語に変換するとき母音の連続を嫌い、“*proso-en-*”, “*meso-en-*”の“-*o-*”を省略することからきています。そのために本来の前

綴りの意味が変わってしまう結果が生じるのですが、それでも構わないからその造語を学術語として暗記させるという無理が生じます。その無理の上にこの造語の本来の意味を理解せよと言うのは医学生に大きな負担を強いることになります。

胎児の発育中、菱脳胞は前方の後脳胞“*metencephalon* < Gr. *meta, after*”から橋と小脳が、後方の髄脳胞“*myelencephalon*”から延髄が形成されます。3脳胞期の菱脳胞を後脳胞ということがありますが、5脳胞期の後脳胞と区別できなくなるので注意が必要です[3]。菱脳胞が腹側へ90度以上屈曲した橋屈部は横径が広くなり、脳胞が菱形を呈するようになります。菱形は本来“*rhomboid*”であり、平行四辺形の一種であると理解されます。後脳胞“*metencephalon*”では、代謝“*metabolism*”, 変態“*metamorphosi*”, 転移“*metastasis*”などの“*meta-* < Gr. *after, behind, change* (変化, 交換)”などとの区別も重要になります。橋“*pons* < L. *pons, a bridge, gangway*”は同一器官の2つの部分を連結する組織片であり、脳橋は延髄と中脳の間、小脳の腹側に位置する中枢神経の一部分です。

髄脳胞“*myel-encephalon* < Gr. *myelos, marrow, fat, soft meat*”には、後述する古代人の主要食品としての骨髄の記憶が反映されています。延髄“*medulla oblongata, oblong marrow* < L. *medulla, the middle, the marrow*”は脳幹の最下部に位置し、上部は橋に下部は直接脊髄に連続する神経組織であり、上行下行の神経路、呼吸循環、感覚機能を扱う神経細胞の集合から成ります。骨髄“*medulla ossium, bone marrow*”は骨の髄腔を満たす造血細胞に富んだ柔軟な結合組織です。延髄も骨髄も共に“*medulla, marrow*”という共通のことで表されているのには意外な感じがします。髄“*marrow*”の英語に「力, 精気, 活力; 濃厚な滋味のある食物」という意味が含まれていますが、これは石器時代の人類が野獣の食べ残した動物の骨髄を漁っていた歴

史を反映しているからです。“marrow”の語源として印欧語の祖語が多数挙げられているのはそれが理由だと思います。その時代には延髄も食用になったのでしょうか。

杉田：終脳は大脳縦列によって左右の大脳半球に分けられ、外套“pallium”, 嗅脳“rhinencephalon”と大脳基底核“basal ganglia”に分かれます。外套と言えば「失外套症候群“apallic syndrome”」が臨床では思い出されますし、動物のサイ(犀)はラテン語で“rhinoceros”です。大脳皮質とは終脳胞に由来し層構造を通する領域を指し、6層構造を有する大脳皮質を等皮質“isocortex”と称し、発生学的に新しいので新皮質“neocortex”とも呼ばれます。6層構造をとらない大脳皮質を不等皮質“allocortex”と言い、原皮質“archicortex”と古皮質“paleocortex”からなります。接頭辞として“archi”と“paleo”の違いを教えてください。ちなみにポローニャ大学にある解剖学教室はTeatro anatomico dell'Archiginnasioと称されます。

池田：胎児の神経管は先端部分が膨らんで終脳胞“telencephalon, *endbrain*”となり、更にそれが左右に分かれて大脳半球になります。大脳の膨らみを覆う皮膜には原(始)外套(古皮質)“archipallium”と古外套“paleopallium”があり、それらの中間に大脳の成長とともに新しい部分を覆う新外套“neopallium”が生じます。その古い外套の一部に嗅球“bulbus olfactorius”という盛り上がりが見えて嗅神経の源基となります。嗅脳“rhinencephalon”は鼻“Gr. rhis, rhinos, *nose*; L. nāsus, *nose*”と脳“encephalon”との合成です。犀は“Gr. rhis (鼻) + ceras (角)”すなわち鼻が角のように尖っている動物のことです。また耳鼻咽喉科は“oto-rhino-laryngology”と言いますね。

大脳の半球は外套“pallium”と呼ばれますが、これはローマ人の上衣“L. pallium, *a coverlet, cloak, mantle*”からきています。嗅球は“bulbus, *a bulb, bulbous root* (球根)”と嗅覚“olfaction < L. olfacio, olefacio, *to*

smell; L. odor, *a smell, odour*, Gr. ozo, *to smell*”との複合語です。大脳半球の深部にある灰白色の部分は神経細胞の集まりで核“nuclei”と呼ばれ、その核複合体を基底核“basal ganglia”としてまとめます。この核“Gr. ganglion, ganglia, *encysted tumor on a tendon*”とは腱の嚢胞状腫瘍を意味しますが、ここでは脳の底部にある神経細胞の塊を意味します。

大脳皮質は新皮質“neocortex”または等発生皮質“isogenetic cortex”または短く等皮質“isocortex”と言い6層に分かれています。等皮質は“iso- < Gr. isos, *equal, the same as*”からきています。これと異なる発生をした皮質を不等(発生)皮質“allocortex”と言いますが、正確には“allogenic cortex”でしょう。また“allo-”は“Gr. allos, *another, the other*”ですから異なる発生をした皮質を意味します。原皮質“archicortex”は“archeo- < Gr. archaeos, *ancient, former, primitive*; arche, *beginning* (原始の皮質)”, “paleocortex”は“paleo- < Gr. palaios, *old, aged, ancient* (古い皮質)”です。

杉田：大脳皮質の外観は、前頭葉“frontal lobe”, 頭頂葉“parietal lobe”, 後頭葉“occipital lobe”, 側頭葉“temporal lobe”, 島“insula”からなります。大脳表面には多くの脳溝“sulcus”とその間に形成される脳回“gyrus”があります。ギリシア語“lobos”は本来耳たぶ“earlobe”のような丸みのある突出を意味しましたが、日本語では「葉」と訳されます。島は臨床では島だけでは何か使いにくいので、最近では島皮質“insular cortex”と呼称されます。ラテン語由来の“insula”の語源は諸説あるようですが、ランゲルハンス島のβ細胞から分泌されるのがインスリンです。

池田：前頭葉“frontal lobe < L. frōns, *the forehead, brow*”はそのまま前頭部を意味し、頭頂葉“parietal lobe < L. paries, *a wall, partition of a house*; L. parietal, *pertaining to the walls of a cavity in the body*”の“parietal”は本来体腔を区分する

壁ですが、ここでは大脳を分かち部分の意味に用いられています。後頭葉は“occipital lobe < L. occipital, relating to the back of the head; L. oc-, back + caput, head”です。すから、これは後頭部を意味します。側頭葉“temporal lobe”は、“L. tempus, tempera, the temples of the head; I-E, the thin part”即ち印欧語では頭部でもっとも薄い部分として名付けられています。葉“lobe < Gr. lobos, lobe of the ear”原義は「耳たぶ」ですが、解剖用語では臓器の区画された部分を言います。ここでは脳溝“sulcus < L. sulcus, furrow, plough; < L. sulco, to furrow, plough, cut forward through”によって大きく区切られた部分を意味します。脳回“gyrus < L. gyrus, Gr. gyros, a ring, circle; < Gr. gyreuo, to run round in a circle”は、脳の畝の高まりが脳半球を周回している様子を現しています。

脳の奥に隠れた部分を島“insula < L. insula, an island, a detached house, apartment”というのは、必ずしも「海中の孤島」ではなく、「個別の建築物」をすでにローマ時代に「島“insula”」と呼んでいました。現在の「アパート」も「戸別に区画した共同住宅」ですね。ガレーノスなどの古代の医師は、臓器の名称に身近な事物の呼称を応用していましたから、これもその一例です。同じ「島」という文字を使っても、膵臓のランゲルハンス島“islet of Langerhans”は間質組織の中にある細胞の塊を指しますから様相が異なります。この“islet < isle + -et 指小辞 (小島)”“から分泌されるホルモンのインスリンは“insula”に由来しますが、“islet of Langerhans”は語源的に訳すと「ランゲルハンス小島 (小体)」となります。

杉田：脳回や脳溝の名前を覚える際、日本人にはなじみのない用語が多くあります。脳溝では、第一次視覚野がある鳥距溝“calcarine gyrus”，脳回では下前頭回の弁蓋部“opercular part”，楔部“cuneus”，帯状回“cingulate gyrus”です。また左右の

大脳半球を結合する交連線維からなる脳梁“corpus callosum”があります。脳梁は前から脳梁吻“rostrum”，脳梁膝“genu”，脳梁幹“trunk”，脳梁膨大“splenium”から構成されます。脳梁膨大部は女性の方が大きいことが観察されており、言語能力の男女差を反映するとする説もあります。ラテン語“cals”は「胼胝」を意味しますが、「脳梁」はドイツ語“Hirnbalken”の日本語訳です。

池田：鳥距溝“calcarine sulcus”は、鳥距“calcar avis”と呼ばれる側脳室後角内壁の上の膨らみの突出の形状が鳥の蹴爪に似ているので、鳥の距(ケヅメ)“calcar avis”と名付けられたのでしょう。踵骨“calcaneal bone”や距骨“ankle bone, talus”など似たような名称が足の底にもあるので要注意です。弁蓋部“pars opercularis”は脳の奥にある島葉を覆う蓋で、それぞれ前頭葉、側頭葉、頭頂葉の縁の回から成る弁蓋“operculum < L. a cover, lid; L. operio, to put on, cover”があります。楔(状)部“cuneus, L. cuneus, a wedge”は大脳後頭葉の内側面上にあり頭頂後頭溝と鳥距溝の間にある楔状の小葉です。しかしこの楔形“L. cuneus, the wedge form division of the rows of seats in a theatre (劇場の座席の楔形配置)”はまさに劇場の座席案内図を脳の解剖図に置き換えたように見えます。またその動詞“L. cuneo, to unite by a wedge of the keystone in building”は建築物を固定する「要石」の機能を脳小葉の中に見ているとも言えます。

帯状回“L. cingulate, cingulum < cingo, to gird, encircle; cingula, a girdle, belt, girth”は脳梁を部分的に取り巻く連合線維束をいいます。脳梁“corpus callosum < L. corpus, body, matter, callosus, with a hard skin, hard-skinned”は「硬い皮膚の物体」で、“G. Hirn, brain; balken, beam, rafter (脳-梁・桁)”という独語の直訳です。この硬い“callosus, with a hard skin, thick skinned, esp on the feet or hand”という言葉も脳と比較して硬いのであり、

“callus < L. callosus, *with a hard skin, hard-skinned*”の「胼胝」のように硬いわけではありません。

脳梁の本体は左右の脳皮質を結ぶ無数の神経線維の板状の物体ですから、これはラテン語がうまく表現しています。交連線維“commissural fibers, *fibrae commissurales* < L. *commissūra, a joining together, union, joint; fibra, a fiber, filament*”は脳同士の間を結合する線維を表しています。脳梁吻“rostrum < L. *rōstrum, the bill or beak of a bird*”, 脳梁膝“genu < L. *genū, the knee*”, 脳梁幹“trunk, *stem of a tree, body*”, 脳梁膨大“splenium < Gr. *splēn, milt, spleen; splēnion, pad or compress of linen laid on a wound*”などの用語は脳梁の各部分に用いられています。脳梁の前後の正中断面を見ると、脳の下辺に沿って曲った薄肉の切片のような形をしていますがその前方下の細い部分が吻、上がって曲がるところが膝、そして後ろの中心部分が幹、最期の膨らんだ末端部分が膨大部と名付けられていますが、脾臓も膨大した臓器からの発想でしょうか。

杉田：ギリシア語splēn（脾臓）は“I-E. spelgh-”に由来し、splanchnon（内臓）と関連してできた言葉とも考えられています[4]。不随意運動の主病巣で運動の調整作用に関与する脳基底核には、尾状核“caudate nucleus”, 被殻“putamen”, 淡蒼球“globus pallidus”, 前障“claustrum”, 扁桃体“amygdaloid body”があります。発生学的には古い淡蒼球を旧線条体と称し、より新しい尾状核と被殻を新線条体と呼んで分けています。ラテン語“pallidus”は「色が薄い」ことを意味します。小児科では息こらえ発作のタイプとしてcyanotic groupとpallid groupに分けられますが、顔色が蒼白となる後者を形容しています。前障は今まで臨床的に注目されてこなかったのですが、ここ1～2年に臨床系雑誌に解剖・機能の総説がいくつか出ている他に、同部のMRI高信号がnew onset refractory status epilepsy

(NORSE) 症候群で知られています。

池田：尾状核と被殻を合わせて線条体と呼び、また被殻と淡蒼球を合わせてレンズ核“lentiform nucleus, *a mass of gray matter the size and shape of a Brazil nut*”と呼ぶこともあります。この説明はこの形状が凸レンズに似ていること、それはレンズ豆“lentil”と呼ばれる植物の実と同様だという事でしょう。この尾状核“caudate nucleus < L. *cauda, the tail of animals, a tapered end of a structure*”は脳梁の下に沿って皮殻と淡蒼球との間に細長く動物の尻尾のように延びています。

被殻“putamen < L. *putāmen, shells, husks, peels*”は淡蒼球“globus pallidus, L. *globus, a globe, ball + pallidus, pale, grey-green, yellow-green; paleostriatum*”を丸く包みます。脳の神経叢は灰白色ですが、ここは特に暗い蒼緑色を特徴としています。この旧線条体“paleostriatum, Gr. *paleos, old, ancient + L. striatus, grooved, fluted*”という複合語は「古い線条」を意味し、淡蒼球を表します。これは尾状核と被殻とを合わせて一つと見なす新線条体“neostriatum”よりも早く発生するという考えによる呼称です。

前障“claustrum < L. *claustra, barriers, barricades, enclosures*”は被殻の近くに垂直に位置する薄い灰白層の障壁で外包によって被殻から分けられます。扁桃体“amygdaloid body, Gr. *amygdale, almond + -oid, Gr. -oidēs, like, resembling*”は、扁桃（アーモンド）の形をした側頭葉前方に埋もれた神経核の複合体“amygdaloid complex”で皮質部と深部の核部からなります。これは周囲の神経核と複雑な結合をし、人間の情動に関与するとされています。

杉田：間脳に続く中脳は、中脳水道より背側の中脳（視）蓋“mesencephalic tectum”と腹側の中脳脚（広義）“cerebral peduncle”があり、後者は中脳被蓋“mesencephalic tegmentum”と狭義の中脳脚“cerebral crus”に分けられます。中脳（視）蓋には

下丘 “inferior colliculus” と上丘 “superior colliculus” があり、両者を合わせて四丘体 “quadrigeminal body” と言います。上丘は視覚入力を受けるので、視蓋 “optic tectum” とも言います。なお左右の大脳脚の間のくぼみは脚間窩 “interpeduncular fossa”, 小脳脚は “cerebellar peduncle” と言います。“crus” と “peduncle” はどのように使い分けるのでしょうか？ ちなみに漢字では、「足」は膝から下あるいは足首から下で、「脚」は腿から下をさします。

池田：中脳背側の中脳（視）蓋 “mesencephalic tectum” と中脳被蓋 “mesencephalic tegmentum” において、これらの用語で分かり難いのは蓋 “tegmen, tegmentum, tectum” の使い分けです。「覆う、蓋う、被う」と言う動詞 “L. tēgo, to cover, protect, shade, hide, conceal, bury” から、「覆い、蓋い、被い」 “L. tegmen, a cover, covering; tegmen caeli, the vault of heaven (天空, 蒼穹)” という名詞や、さらに具体的に「被覆」 “tegmentum, cover, covering, armour, a defence, protection; tegmen corporum, tegmenta, armor (武装)” という物品名も作られます。しかし同じ「被覆」 “tectum, a covering, roof, ceiling; a roofed building, house, shelter (覆われた場所, 避難所)” の原語には完了受動分詞としての受動の意味が含まれているのですが、医学用語の使い分けにはそこまで反映されてはいません。少なくとも二つの臓器の間に「覆う、覆われる」「守る、守られる、防ぐ」という関係が存在するのか調べましたが、それも確認できませんでした。命名者にはそこまでの関心はなかったようです。

中脳（視）蓋 “mesencephalic tectum” には下丘 “inferior colliculus” と上丘 “superior colliculus” がありますが、「丘」 “L. collis, high ground, hill” ではなく「小丘」 “colliculus” と言う方が正確です。両者を合わせて四丘体 “quadrigeminal body” と言うのは、双子 “gemini”, 三つ子 “trigemini”, 四つ子 “quadrigemini” からです。この膨ら

みを単なる複数ではなく同じ親から同時に生まれた兄弟と考える発想でしょう。腹側の大脳脚（広義）は “cerebral peduncle” と狭義の大脳脚 “cerebral crus” に分けられますが、“L. crūs, crūris, a leg (脚), shank (脚), shin (脛)” と “L. pēs, pedis, a foot of any animal, a foot of a table” との間には長さの使い分けがあります。また同じ縮小辞の “-culus” を “-unculus” にすると意味が変わります。例えば、“L. pediculus, a little foot (小足), pedicle of a fruit or leaf (小柄)” と “L. peduncul, a louse (シラミ)” などです。

杉田：医学語源用語対話Ⅱでは中脳に脳神経核がある動眼神経、滑車神経、三叉神経を解説いただきました[5]。今回は橋と延髄背側部の脳神経についてお聞きします。特に用語としてなじみが乏しい内耳神経 “vestibulocochlear nerve”, 舌咽神経 “glossopharyngeal nerve”, 迷走神経 “vagal nerve” に加え、脳神経核である疑核 “ambiguus nucleus” について解説願います。内耳神経 “vestibulocochlear nerve” は直訳すれば「前庭蝸牛神経」となります。内耳は聴覚の蝸牛、平衡感覚の半規管と前庭で構成されており、前庭は内耳迷路の中央に位置しています。迷路 “labyrinthus” は三半規管と耳石器とからなります。“vestibulum” とは本来道路に面して他の3面を建物に囲まれた「前庭」の意味でした。ローマを訪問した際 “vestibulum” と表示された城壁外の聖パウロ大聖堂の見事な前庭が思い出されます。

池田：ここでは前庭と迷路ということばの検討をします。ギリシア神話にはミノタウロスとテーセウスの名高い伝説がありますが、それは迷宮を舞台にしています。クレタ王ミノス王には神に対する不敬の故に半人半牛の怪物ミノタウロス “Minos + tauros, ox” という子供が生まれ、その怪物を押し込めるために迷宮を建設しました。そしてその怪物の餌食にするために毎年ギリシアから人身御供を供給させていましたが、その苦

難を解決するためにギリシアの王子テーセウスが王女アリアドネーの助けによって迷宮に入って怪物を退治したという伝説です。これには文化水準が高いクレタの王宮の複雑な建築構造を迷宮に喩えたという解釈もありますが、この迷宮“labyrinthus”の名を内耳の複雑な構造に適用したイタリアの学者Gabriello Fallopi (1523-62)にはこの伝説が脳裏にあったでしょう。そして内耳の中心の蝸牛管の前に前庭を配置したのも意図的でしょう。

先にも述べましたが古代ローマの高級住宅は高い壁に囲まれていて門から入ると玄関の間“vestibule (前庭)”それに続く中庭“area (野), court-yard”とに分けられています。この中庭“area”も「野(ヤ)」と解剖学では命名されていますが、「領域」ではあっても「野原」ではありませんから要注意です。蝸牛管も三半規管も硬い頭骨の中に納められて嵌まり込み、クレタの石造の頑丈な王宮になぞらえて迷宮と呼ばれるのにふさわしい構造をしています。前庭にも中庭にもその機能に応じた意味が籠められていたのでしょう。

疑核“ambiguous nucleus”は迷走神経や舌咽神経に遠心性の内臓神経を送り込んでいる核であることからこのように称せられていますが、その語源は、“L. ambi, ambo, twofold, double, round about; L. ambigo, to wander about, doubt, argue”と“ambiguus, wavering, changing, uncertain, doubtful”つまり「場所や方向が不定で疑わしく定まらない」性質のものを表していると考えられます。しかし“L. ambi < Gr. amphi, on both sides of, on all sides”という語源から判断すると、「両方向へ、全方向へ」と向かう神経の伝達方向を強調しているとするのが自然でしょう。「疑わしい」と否定的に見る必要はないでしょう。

「迷走」についても同じことが言えます。迷走神経“vagal nerve, vagus nerve L. vagus, wandering”は延髄後外側溝から舌

咽神経、副神経と共に多くの枝を伸ばしながら腹部に降りて多くの内臓に分布してそれらの機能調節に関与するのでこのように呼ばれます。この迷走“L. vagus, ranging, roving, wandering < vagor, to go to and fro, spread abroad, range, wander, roam”とは「広く分布して伸び広がる」神経の張り巡らし方を形容することばであって、「確固とした目標もなく彷徨い歩く放浪者」ではなく、「ここで一仕事をして、また下へと向かう働き者」の神経です。舌咽神経“glossopharyngeal nerve”は“Gr. glotta, tongue”, “pharyngeal, Gr. pharynx (咽頭), the throat, the joint opening of the gullet and windpipe”, “linguo, L. lingua, tongue”からで、舌と咽頭を支配する神経です。

杉田：紀元前3000年頃に活躍した戦国時代の思想家荀子は、「古代の聖王たちの言葉を知らなければ、学問の大きさを知ることができない」と記しています。医学用語は多くの先人が命名し、医療に必要不可欠な「道具」として役立ってきました。「道具」とは、文字通り「道を求めるための用具」を意味しています。道具たる医学用語の語源を知ること、医療への道をより深く究めていきたいものです。

貢献者

杉田と池田は本稿を執筆し、最終稿を確認した。

財源支援

本報告は「挑戦的萌芽研究（平成30年度－令和2年度）「神経発達症への包括的社会脳育成プログラム開発ならびに教員養成（研究代表：杉田克生）」の助成（令和3年度まで延長）を得て実施した。

利益相反

著者らは利益相反を有しない。

倫理的承認

非該当。

データの可用性

非該当。

文 献

- 1) 杉田克生, 池田黎太郎. (2020) 医学用語語源対話VI. 千葉医学96, 93-9.
- 2) Ernest Klein. (1971) Klein's Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language. Oxford: Elsevier Scientific Publishing.
- 3) 寺島俊雄. (2011) 神経解剖学講義ノート, 東京: 金芳堂.
- 4) 小川徳雄, 永坂哲夫. (2006) 医学用語. その批判的脱構築, 東京: 診断と治療社.
- 5) 杉田克生, 池田黎太郎. (2013) 医学用語語源対話II. 千葉医学89, 49-52.

謝 辞

本稿の内容につきご助言いただきました亀田総合病院脳神経内科部長福武敏夫先生に深謝いたします。
